

おお おか りえ もん 大 岡 利 右 衛 門

進んで働く

水田が広がるわたしたちの野洲市は、毎年秋になると豊かに稲穂^{いなほ}が実ります。しかし、今のように米作りが盛んになるのには、たくさんの人たちの努力が必要でした。生涯にわたってよりよい米作りに尽くした大岡利右衛門も、その一人です。

利右衛門は、1832年（天保3年）、野洲郡中里村比留田^{ひるた}（今の野洲市比留田）に生まれました。利右衛門は子どものころから働き者で、田畠で働く父母を兄とともに進んで手伝いました。

1842年（天保13年）10月、野洲郡三上村で天保一揆^{いっぽう}が起きました。土川平兵衛^{つちかわへい}たちの指導者を中心にして、米作りに生きる村人たち約4万人が、自分たちの生活を守るために命がけで起^たちあがりました。

10歳になったばかりの利右衛門は、天保一揆に加わることはありませんでしたが、ふるさとで米作りに生きる村人たちのたくましい生き方に感動しました。



比留田の集落

新しい品種を作る

利右衛門は10歳のときの感動を胸に、農業に励みました。

ところで、江戸時代がまもなく終わりを迎えようとしていたそのころ、米作りは今とは違い、昔ながらの方法で行われていました。日^ひ照りが続いて水不足になりましたり、台風や大雨にあったりすると、ほとんど収穫^{しううかく}できなくなることがありました。

米作りの難^{むずか}しさに苦労する村人たちの中で、利右衛門は考えました。
「どうすれば、おいしい米をたくさん実らせることができるのだろうか。」
村人たちのために新しい米作りを始めようと決心した利右衛門は、30歳になつたとき、兄から田を分けてもらい分家^{ぶんけ}しました。自分で米作りを始めた利右衛門は、さっそくさまざまな工夫や研究を重ねながら農業に励みました。

利右衛門は、毎日、村のまわりにある自分の田に出て働きましたが、田があちらこちらに広がっていたため、研究が進めにくいくことがありました。

そこで、村人に頼んで田を交換してもらい、自分の田を一か所に集めました。ときには、一枚の田を交換してもらうために、余分な田をつけなければならぬことありました。

研究の準備を整えながら、利右衛門は少しでもよい米を実らせる種作りに取り組みました。遠く離れた村々を訪ね歩き、たくさんの米が実るよい種もみをもらってきては、自分の田で育てました。

なかには、大事に育ててもうまく実らないことがありました。しかし、何度も失敗を繰り返しながら、利右衛門は自分で改良を加え、おいしくてたくさん収穫できる新しい米の品種をついに作り出すことに成功しました。

利右衛門が作り出した品種には、『大岡』、『新日光』などがあります。利右衛門は損得を抜きにして、苦労して作り出した新しい種もみを村人たちに提供しました。

利右衛門の作り出した品種は、ふるさとや近くの村だけでなく、県外の村でも豊かな実りをもたらし、たくさんの村人たちから喜ばれました。1884年（明治17年）、52歳のとき、利右衛門のもとに京都府の村からも感謝状が届いているぐらいです。

正条植えを広める

1868年（明治元年）、長く続いた江戸時代が終わり、新しい時代を迎えるころから、利右衛門は『正条植え』を始めました。今では、田の苗を規則正しく植える『正条植え』は、どこでも当たり前のように行われていますが、昔は種もみを適当にばらまくのが普通でした。

同じ間隔で苗を植える『正条植え』は、たいへんな苦労と時間がかかりました。となりの田ではもう青々としているのに、利右衛門の田はまだ半分も植えられていないことが何度もありました。利右衛門の研究のことを知らない人たちのなかには、利右衛門の植え方をあざ笑う人もいました。

しかし、稻がよく育つためには、日光がよくあたり、風通しもよいことが大事だと考えた利右衛門は、毎年『正条植え』を続けました。歳月がたつにつれ、利右衛門の『正条植え』をすると、秋にはたくさん収穫できることが少しずつ分かってきました。すると、それまでは『正条植え』に見向きもしなかった人たちが、利右衛

門の話を聞くようになりました。

利右衛門はふるさとの村だけでなく、遠くの村までもおもむいては、新しい苗の植え方を指導しました。利右衛門が新しい植え方を始めて約 15 年後には、県内外のたくさんの村で『正条植え』が行われるようになりました。利右衛門の地道でひたむきな努力が実ったのでした。

さらに工夫を重ねる

さらに利右衛門は、田のあぜに植えてあった木を切ることを村人たちにすすめました。田を囲うようにして植えてあった木のために日当たりが悪くなり、収穫がおちることを防ぐためでした。利右衛門は木を植える代わりに、あぜ地を利用して大豆だいぞうをつくることを村人たちに教えました。

また、明治の初めのころ、湖岸の村々では、琵琶湖の水があふれて農作物が全滅ぜんめつすることが何度かありました。湖岸の村人たちの様子に心を痛めていた利右衛門は、アワやヒエなどの雑穀ざっこくが水害に強いと知ると、すぐにこのことを試し、湖岸の村々にアワやヒエなどの種を配って栽培さいばいを広めました。

他にも利右衛門は、新しい農地を開墾かいこんしたり、野菜の種を改良したり、排水や肥料についても研究したりしました。

利右衛門は自分の研究や工夫の成果を自分だけのものにはしませんでした。いつも村人たちの幸せを思い、自分の努力の成果を人びとに伝えました。

年をとって田畠へ出るのがたいへんになんしても、利右衛門は自分の知識や技術を少しでもたくさんの人びとに伝えようとしました。農業学校の先生として若い人たちを指導することもありました。

1912 年（大正元年）、よりよい米作りに一生をかけた利右衛門は、ふるさとの村人たちに惜しまれながら 80 歳の生涯を閉じました。

わたしたちが毎日のように食べている近江米は、利右衛門のひたむきな努力とふるさとの人たちを思う心の結晶なのです。



大岡利右衛門の肖像画